

# 「珍念」

賀川良 著

2023年12月18日 製作  
東京都青梅市二俣尾1の96の1  
080の3601の7605

キャスト

珍念

須賀川良二

金田美佐江

長谷村英子

私が統合失調症で入院した遠い昔に病出会った男の話です

彼のあだ名は珍念

年の割に身体が小さく小太りで、お世辞にも見かけは良いものではありません。

その為、仲間の入院患者から軽く扱われ、

珍念というあだ名を付けられた男の話です

私が珍念と言葉を交わしたのは、入院して半年後、

閉鎖病棟の生活にも慣れて来た頃でした

病棟の廊下の～台のベンチに腰掛けて、話ができるようになっていた

須賀川がベンチに腰掛けて、ため息をついた

須賀川は自分の心がコントロールできない事に絶望的になっていた

周りを眺めると、患者は下を向いて何やらブツブツ独り言を言っているもの、

熱心に本を読んでいるもの、ラジオを聞いているもの、

一心不乱にお経を読み上げているもの、男同士で抱擁しているもの、

高齢の老婆と若い男が、

手を繋いで廊下を行ったり来たり、キスをしたりしている。

一見、普通の日常に見えるところもあるが、何処か違和感のある光景が、

須賀川の目の前に有った

須賀川がベンチに座っていると、目の前に珍念が駄菓子差し出した

須賀川は、自分の精神のコントロールができず深いため息をついている

須賀川

「ハァ〜」

珍念

「食べる？」

須賀川

「いや、要らない」

珍念

「僕、滝沢恒夫」

須賀川

「みんな珍念って言っているよ！」

「そう！ じゃあ 珍念くん」

「僕は、須賀川良二」

「つい、半年前に入ってきた」

珍念は坊主頭で、上目遣いに人の顔色を伺うように須賀川を見上げた

珍念

「須賀川さん、食べる？」

須賀川

「要らない」

と素っ気なく言った珍念はがっかりした顔をした  
しばらく経って

珍念

「食べる？」

須賀川はなんで何度も駄菓子を食べろと言うのかわからず、  
珍念に理由を尋ねてみた

須賀川

「珍念くん、なぜ僕に駄菓子を食べろって言うんだい？」

「僕も十円位の駄菓子なら何時でも食べられるよ！」

「馬鹿に（するな）……」

と言いかけた時珍念はポケットからシワくちゃになったメモを  
大事そうに取り出した

珍念は、大切そうに須賀川に渡し百

須賀川は珍念から受け取り、目を通した

それは珍念の母の手紙と預かり証のメモだった

預かり証のメモは珍念が以前入院していた病院からのもので、

珍念が入院した当初病院が珍念宛の母親の手紙を預かったという証明のメモだった

珍念

「これ……？」

須賀川はメモ書きの日にちを確認して言った

須賀川

「このメモ、十五年前の日付だよ」

珍念

「ウン！」

「十五年前に、母さんと病院に来て入院したんだ」

須賀川は疑問に思っ

須賀川

「でも、なんで僕にそんなもん見せるんだ?!」

少し怒り気味で言った

珍念はバツ悪そうにして、また十円の駄菓子を須賀川の前に出した

須賀川はムツとして

須賀川

「だから、そんなもん要らない！」

「何でいらんというのに勧めるんだ！」

すると珍念は頭を下げ、うつむいて小声で言った

珍念

「ごめんなさい……」

「字が……」

「字が……」

「読めないので……」

須賀川は、はっと我にかえった。

珍念は入院したため、小学校へ行っていないのだ。それが言いづらくて、十円の駄菓子須賀川に渡し、その代わりにメモを読んでもらう、もくろみだったのだ。

須賀川は珍念の無念さ、恥ずかしさ、心の痛みを推察できなかった自分を、心の中で恥じた。そして、珍念に

須賀川

「十円駄菓子うまそうだね」

「俺、急に駄菓子が食べたくなったよ」

と取ってつけたような言い訳を珍念に投げかけた

珍念は、うつむいた顔を上げ、須賀川の顔を見上げてニコツと笑顔でわらって

珍念 「はい！、半分こ」

珍念は駄菓子をさし出した

須賀川 「うん、じゃあ、半分づつの五円で御縁がありますように！」

と言って駄菓子を口に入れた

これが珍念との最初の出逢いであった

のちに、後でわかった話だが珍念は病院の日用品一週間の金額は百円であった

日用品とか、もろもろ購入するい費用が一週間で百円・・・

それで、歯磨き、歯ブラシ、ティッシュ、下着、その他もろもろの生活用必需品を 購入するお金だ

珍念はその僅かな金で購入した駄菓子を須賀川に分けてたのだ

無料でお願いするのではなく、対価を支払うという意味で・・・

須賀川はそれを知ったとき、珍念のまじめさ、正直さ、

そして彼のごまかしのない生き方に、

本当の人間の生き様を見た。どんな、環境でも人間として真摯に生きる様を・・・

須賀川 「じゃあ、これがメモ、わかつね……」

「要するに病院の預り証だ！」

珍念 「ウン……」

須賀川 「お母さんの手紙を何年何月に預かりました……、というメモだ」

珍念 「ウン」

須賀川 「じゃあ、これから本文」

須賀川は手紙を開き、中を黙読し始めた  
だんだん、読み進めるにつれて、珍念の家庭事情がわかってきた  
そして大方の内容を理解した上で、珍念に呼んで聞かせた

須賀川 「恒夫がこれを読むころには、お母さんは遠くに行っているとおもいます」

「恒夫を病院に入れたことは、母にとっては致し方のない最後の手段でした」

「恒夫、必ず、また迎えに来ますから、その日を待っていてください!」

「必ず……!!」

「必ず……!!」

「その日を……」

「母より」

須賀川はその手紙を読みながら、珍念の母を思う気持ちと事情がわかり始めた

珍念の母がやむにやまれぬ事情で病院を頼ったのだった

須賀川は涙がほほをつたい、嗚咽が混じり、声が出なくなった

そして、下を向いて、珍念にその手紙を返した

ベンチの端の暗がりて金田美佐江が、急に低い声で話し始めた

金田美佐江 「耳障りなんだよ!」

「さっきから、聞いていけばゴチャ、ゴチャ……」

「お涙頂戴なんざあ……、聞き飽きた!」

須賀川は金田のほうに顔をむけて、声を荒らげて

須賀川 「あんたには関係ないだろう!」

金田美佐江

「ここは、あんた達だけのベンチじゃないんだ」

「お涙頂戴話は、他でやってくれ！」

「耳障りだ！」

須賀川

「なんだと！」

「どこの女だか知らないが、公の場所で話すのが、どこが悪い」  
「いい加減にしろ！」

金田

「フン！ お涙頂戴の話など、チャンチャラおかしいワイ！」

珍念

「やめて！」

「やめて！」

「看護婦さん」

「看護婦さん」

二人は一触即発の状態になり

珍念は大声で看護婦を呼んだ

看護師の、長谷村が慌てて看護準備室から出てきた

金田美佐江を引き止め

長谷村

「ちょっと!」

「ちょっと、待ちなさい!」

そして、金田と須賀川に状況を尋ねた

長谷村

「どうしたのですか?」

須賀川

「この人がイチャモン着けて来るんです」

「ただ普通に話をしているだけなのに・・・」

長谷村

「金田さん、そうなんですか?」

金田

「こっちがタバコを吸って居るのに、ゴチャゴチャうるさいんだヨ!」

長谷村

「タバコを吸っているときに、うるさかったのね?」

「須賀川さん、そうですか?」

須賀川

「そんなにでかい声で喋っていません」

金田

「感に障るんだよ！」  
「あんたらの話は！」

金田はでかい声で怒鳴った

須賀川

「なんだと！」

長谷村

「やめなさい！」  
「口喧嘩は！」  
「二人共、保護室ですよ」

金田

「うるさいんだよ！」  
「まったく・・・」

金田はすて台詞を残して病室へ去っていった

長谷村

「須賀川さん、ごめんなさいね」  
「金田さんは、今気が立っているので」

「最近、葉が変わったせいとか、ほかの人と喧嘩腰になってしまってます」  
「決して悪い人ではないんですよ」  
「気にしないでくださいね」

須賀川

「はい、長谷村さん」  
「こちらもつい大声を出して・・・すみませんでした」

長谷村

「わかってくれてありがとうございます」

須賀川

「はい」

翌日、病院のベンチ  
珍念が漫画雑誌を拾って来て見ている  
須賀川は珍念が字が読めないのに、漫画を見ているのをいぶかしがりながら、  
珍念に話しかけた

須賀川

「珍念くん、何読んでるんだい？」

珍念

「漫画の吹き出し」

須賀川 「シタツケ、君は字が読めないのじゃないの？」

珍念は素直になんの銜いもなく答えた

珍念

「ウン」

「漫画の吹き出しのカナで文字を勉強しているんだよ」

須賀川はびっくりして、珍念の顔をみた

珍念は自分の立場と現実を直視して、少しも逃げず、恥ずかしがらず、格好をつけず、なんの銜いもなく、自らの境遇から少しづつ、亀の歩行の如くゆっくりと、

しかし着実に自分なりの方法を編み出して、脱出を試みているのだ

須賀川は、その努力と健気さに心が洗われ、自らを顧みて恥じた

自分自身も含めて、今の時代の人間はこの条件が揃わないからスタートできない、などとやらない理由をつけて、何時も手を動かさない。

不平不満分子が多いからだ。

須賀川は自分が精神病院に入って来たのも、このことが一部原因であることも、

否めないと薄々気がついていた

珍念は自分の身の上の不足を、自分のアイデアと努力で着実に解決していつているのだ

珍念と須賀川がそのやり取りをしているときに、

看護婦の長谷村が通りかかり珍念に声をかけた

長谷村 「アラ！ 珍念さん、何をしているの？ 楽しそうね」

笑顔で声をかけた

珍念 「アッ！ 長谷村さん！」

珍念 「漫画の吹き出しのカナを見ているんです」

「それで綴方を覚えたいんです」

長谷村 「へえ〜」

須賀川は長谷村の茶目っ気のある、珍念に興味津々な笑顔を眺めていた  
長谷村の瞳の中に、真摯な愛情深い眼差しを感じた

須賀川 「長谷村さんは、クリスチャンなんですか？」

長谷村

「そうです」

須賀川

「噂で聞きましたが、アメリカのクリスチャンカレッジで、勉強したそうですね」

長谷村

「ハイ、そうです」

「この院長先生には、日本に帰って来て、ナス修行時代に大変お世話になりました」

「今その御恩返のつもりで勤務しています」

「先生は医学や患者さんのために色々と尽力した素晴らしい先生です」

「私も若い頃、医学や人の道など、色々教えていただきました」

「それが今、本当に役に立っています」

須賀川

「へえ」

「そうなんですか」

長谷村

「キリスト教は献身的な活動をよく行います」

「そして人道的な立場の愛情深い看護や救済に優れています」

「私もクリスチャンです」

須賀川が手を合わせて

「ありがたいです」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

長谷村

「アラー！」

「それは念仏ですね」

「それを言うなら、アメンです」

須賀川と長谷村がハハハハと笑った

長谷村

「ところで珍念さん、かな文字の書き順、わかりますか？」

珍念

「わかりません」

長谷村

「ここに、カナ文字書いてもらなさい」

珍念は、持っていた紙切れに文字を書いてみた

長谷村

「書き順が違いますね」

「あ』の字はこう、い』の字はこう」

珍念は一生懸命つづり方を勉強した

長谷村

「そう、そう、その順番」

しばらく長谷村はつづり方を教えて、時計を見た

長谷村

「あら！ そろそろ休憩時間終わりだわ」

「珍念さん、良かったら、また休憩時間に教えてあげるから」

「明日、またこの時間にこのベンチでいらっしやい」

長谷村は、そそくさと看護準備室に戻っていった

須賀川

「珍念くん、良かったね」

「綴方教えてもらえるようになって」

珍念

「ウン」

「字が書けるようになったら、母さんに手紙書くんだ」

須賀川 「おお、そうだね」

須賀川は返事をしながら、珍念の母親が以前の住所に居るのかも疑問であり、珍念が入院してから十年以上連絡がない母親が果たして返事を書くかどうかとも疑問だった

長谷村と金田がベンチ前で身の上話をして居る

金田

「長谷村さん、聞いてくださいよ！」

「苦しくて仕方ありません！」

「私はは若い頃、男と同棲して珍念さんと同じ位の男の子を授かりました」

「しかし、相手の男は子供ができると別の若い女と

何処かへ蒸発してしまいました」

「挙句の果てに逃げた男の借金を背負う羽目になりました」

「風俗で働き借金を返していました。そのあと、

風俗で出会った男と同棲しましたが、

ぐうたらで酒飲み、さんざん、貢ぎました。

挙げ句の果てに、若い女とトンスラされ、

憂さ晴らしに酒を飲み始め、溺れついに精神病院で薬を

服用するようになりました」

「子供が足手まといとなり、施設に預けました」  
「自分の人生に嫌気が差し、酒と精神薬を大量に飲み自殺しましたが、気がついたら精神病院の中이었습니다」  
「私を捨てた男は恨めしいと思いますが、今となっては、せめて捨てた子供に一目会いたいとおもいます」  
「それが私の母のとしての気持ちです」  
「若い頃は惚れた腫れたの、一時の感情や快楽にも酔いしれましたが、今となってはただの世迷い言、人の道を踏み外した愚かな女が、今さらしおらしい事を言ったって、誰も信じないし、同情なんてしてもらえない」  
「せめて、心残りを解消して、このやり切れない現実の罪滅ぼしをしたいと思います」  
「過去を振り返り反省してもなんにもならないし、自分の蒔いた種は、いつかは刈り取らねばならない、不都合の種は私の一生を賭して、結末に導かなければならないと思います」  
「それが、人の道であり、神仏が示した救いの道だと考えています」  
「自分の良い行いも悪いことも、全て自分に返ってきます。」  
「私は、50歳近くになって、このことに気が付きました」  
「というか神様に気付かされました」  
「天に唾すれば自らの顔にかかるように、己の善行、悪行共々、全て自分に返ってくる事を、今になって思い知りました」

長谷村

「いや、善行、悪行すらも神の前では意味がない」  
「全て天地自然の理の中で生じる現象でしかないと思います」  
「人間は社会的動物です。」  
「その社会で悪行や善行は存在します」  
「それは人間社会のルールに対しての良いこと悪いことです」  
「天地自然の理の中のルールとは、また違うものだと思います」

金田

「自分の行いは全て自分に返ってきます」  
「天に唾するように」  
「それが天地自然の理だと気が付きました」

長谷村

「あなたの仰ることはわかりました」  
「キリスト教的に考えると些か異なります」  
「人は元々原罪という罪を背負って居ます」  
「主なるイエス様が、自らが罪を背負って死なれた。そして復活した」  
「それがキリスト教の教えです」  
「あなたの罪は、すでに神によって許されているのです」  
「人は罪深きものです」  
「誰でも・・・」

金田

「私は、珍念さんを見ていると自分の子供のことを、思い出します」  
「だから、珍念さんを見たくない、会いたくない、姿も声も聞きたくない」

長谷村

「だから、あんなに突っかかってくるのですね」

金田

「はい、そして、気持ちをコントロール出来なくなるのです」  
「自分で、わかっていてもだめなんです」

長谷村

「そういう時に神様に頼るのです」  
「人は苦しみの中に生きています」  
「誰でも・・・」  
「その中で、どのように生きるかが問題なのです」  
「慎み深く、神を信じて生きる、或いは欲望のままに放蕩無頼の限りを尽くして生きる」  
「どちらの人生も人が選択できる生き方です」  
「どこに幸せのポイントを置くかです」  
「慎み深く生きるか、欲望の赴くままに生きるか」  
「そして、最後には自分でけじめをつけなければならぬ」

金田

「そうですね」  
「長谷村さんは、どうして常識や倫理観に拘らず、欲望の赴くままの人生も選択肢として選ぶことが出来るかと考えるのでしょうか」

長谷村

「人は先ずは生物であるということです」

「そしてそこに人間社会という状況が付加されます」

「そこには、人間社会で、お互いに住みやすくするために  
社会ルールが設定される」

「精神病の問題は主にこのルールに起因しています」

「この社会ルールと、生物としての欲求が一致しない」

「そこに過度のストレスが生まれ、自らの精神崩壊に招く」

「ここは精神病院です、精神病の治癒回復と再発を防止を  
考えなければなりません」

「病気の治療はもとより、再発防止を自分なりのスタイルで  
確立しなければなりません」

「そして社会適合を・・・」

「個人個人で異なりますが、今のところ薬だけでは寛解は勝ち  
取れないのが現状です」

「生活習慣の適正化、具体的に言うところ早起きの習慣化、  
規則正しい生活の定着化・・・」

長谷村は、腕時計を見て

長谷村

「あら、もうこんな時間」

「今日は良いお話ができました」

「金田さん、またお話をしましょう」

金田 「はい、今日は本当にありがとうございました」

珍念が母のメモ書きを見ている

珍念 「明日、母さんが面会にきてくれるんだあ」

須賀川 「おおー！、お母さんが面会に？」

珍念 「ウン！」

須賀川 「良かったなあ」

珍念 「お母さんが」

「お母さんが、面会に来る！」

翌日

須賀川 「珍念くん、お母さんは面会にきたかい？」

珍念 「いいえ、来なかった」

須賀川 「そうか！」

「残念だったなあ」

珍念 「ガツカリだよ」

そこに、金田がベンチの反対側から、タバコが煙たそうに目をしばたかて

金田

「そんなの来るわけがない」

「今頃、何処かの男と宜しくやって、お前のことなんか、これっぽっちも考えていないさ」

須賀川

「おい！　なんてこと言うんだ！」

「人を傷つける事を言うんじゃない！」

金田

「あたしや、世の中の道理を言っているだけだ！」

須賀川

「そんな事言うんじゃない！」

須賀川と金田は立上り一触即発の状態

珍念

「看護婦さ〜ん！」

「看護婦さ〜ん！」

珍念は須賀川と金田が今にも掴みかかりそうなので看護師を呼んだ  
看護準備室のドアを開ける音がけたたましく響き、長谷村が慌てて出てきた  
須賀川と金田がにらみ合っている間に割って入り

長谷村

「チョットやめなさい！」

「二人共、離れなさい！」

「金田さん、向こうへ行きなさい！」  
「須賀川さんも！」

長谷村はにらみ合っていた。人の間に入り、引き離れた

長谷村

「金田さん部屋へ戻りなさい！」

「早く戻りなさい！」

「須賀川さんも！」

金田が病室に入るのを見届けてから、長谷村が須賀川に話をし始めた

長谷村

「須賀川さん」

須賀川

「はい」

長谷村

「実は金田さんですが、最近、薬を変えたせいか、病状が悪く人によく食って掛かるのです」  
「決して悪い人ではないのですが・・・、許してあげてくださいね！」

須賀川

「いえ、はい！」

「でも、彼女はひどすぎます」

「あれじゃ、誰だって怒ります」

長谷村

「そうね、でもね、須賀川さん」

「人は自分でもわからない時があるの」

「自分の人生が自分の意志でコントロールできずに、勝手に進んでしまう時があるの」

須賀川

「はあ」

長谷村

「あなたには、わからないかもしれないでしょうが、この病院に来る人は、大体がそのような人です」  
「精神的に参ってしまい、酒や薬に溺れ、どうしようもなくなり、流れ着く」  
「精神病院はそういうところです」

須賀川

「はあ」

長谷村

「でもね、そこから立ち上がって退院していく人を見ると、看護師やっついてよかったなあ」と思います」  
「クリスチャンで良かったと思うんですよ」  
「微力ですが自分の力が役に立った・・・と思うんです」  
「看護師として、クリスチャンとして生きてよかったと思うんです」

須賀川

「はあ」

長谷村

「一方、精神を病んだ人々の中には真面目すぎて自らを追い込んでしまう人もいます」  
「学校の先生のモンスターペアレンツ問題とか」  
「何れにしても、真面目に生きようとして、社会適応できないでここに来ってしまう。そういう方々です」  
「患者さんは本当に苦しんでいる真面目な方々ばかりです」  
「あと、珍念さんですが、お母さんはもう既に亡くなっています」  
「珍念さんはその事を知らされていますが、彼には現実が受け入れられないのです」  
「妄想で母親が、面会に来るのです」

長谷村が急に思い出して

長谷村

「アッ！ 院長先生がお呼びです！」

須賀川 「エッ？アツ、ハイ、かしこまりました！」

須賀川 いぶかしがりながら立ち上がり、ベンチを離れる

須賀川 「なんだろう？」

須賀川 は院長の話聞いてベンチに戻って来た、ため息混じりに

須賀川 「退院かあ」

長谷村が通りかかる

須賀川 「長谷村さん」

長谷村 「はい」

須賀川 「僕、退院だそうです・・・」

長谷村 「わっ！おめでとう」

須賀川 「いえ、まだ治っていません」

「先生にもそうお話しをしたのですが」

「なんで院長は退院なんて言うのかなあ」

長谷村 「須賀川さん、精神病は完全になるまで病院にいる訳では無いのです」

「社会に出て、あらゆる困難に立ち向かって、それに耐性をつけて治るんです」

「だから、病院と薬だけでは治らないです」

須賀川 「えっ、そんなあ」

長谷村 「ここからが、最も難しいところなのです」

「社会に出て、ストレスに耐性をつける」

「最後の総仕上げです」

須賀川は不安と焦燥に駆られて、ため息とともに

須賀川 「はい」

須賀川は内心、未知の将来の不安におびえて鳥肌が立ってため息を付き、塞ぎ込んでいた手には般若心経の経本を持っている

須賀川 「観自在菩薩、両親般若波羅蜜多時・・・」

須賀川は口の中でブツブツと経文を唱えているいつもの様に須賀川がベンチに座っていると長谷村が通りかかる

長谷村 「須賀川さん、もうすぐ退院ね」

「最初は社会が怖いかもしれないけど、大丈夫だから」

須賀川 「はい、長谷村さん有難うございます」

退院当日

須賀川は般若心経の経本を一心に唱えている

「色即是空、空即是色」の部分に来たとき、今までの様々な病院の出来事が走馬灯のように脳裏に浮かんだ

須賀川 「色即是空・・・」

「空即是色・・・」

「現世は即ち空・・・」

「空は即實在・・・」

そして、珍念に思いを巡らせた

「色即是空」、現世は実体を伴わない

将に、珍念は実体の伴わない妄想の世界に生きて、意識という実体を伴わないものが實在をコントロールしている  
須賀川は「色即是空、空即是色」をこのように考えた

そして呟いた

須賀川

「現世の事象は実体があるのではなく、それは実体のない虚構でコントロールされている」

「現世は即ち空蝉・・・」

「空蝉は即ち實在・・・」

須賀川は自分の体験から現世の構造を垣間見た

「色即是空」とは、現世(色)は空(実体)がなく縁起によって存在する

「空即是色」とは、実体のない事象が實在(色)をコントロールする

須賀川

「色即是空……」

「空即是色……」

「現世は空蟬……」 (うつせみ .. 蟬の抜け殻の意味)

「空蟬は実在……」

「現世は空蟬……」

「空蟬は実在……」

言葉を噛みしめるように、何度も何度も呟いた

須賀川

「現世の事象は実体を持つのではなく、執着を離れることで苦しみから放れる」

この経文の意味が須賀川の脳裏に響いた

そして、閉鎖病棟の扉が開かれ

須賀川は身も精神も解き放たれた

まるで「色即是空、空即是色」の境地を悟ったかのように・・・

完